



**日本ハンドボール学会第 8 回大会
抄録集**

**The 8th Annual Meeting of the Japanese Association of
Handball Research**

2020 (令和 2 年)

2 / 29 (土) ・ 3 / 1 (日)

会場：中京大学名古屋キャンパス

大会プログラム

2020年2月29日

13:00～ 受付

13:30～13:35 会長挨拶 田中 守 (福岡大学)

13:35～17:12 一般発表 1～3

18:30～ 情報交換会 (名城大学名古屋ドーム前キャンパス「ムーガーデンテラス」)

2020年3月1日

08:40～ 受付

09:10～10:10 基調講演「ハンドボールとオリンピック
—1972年プログラム採用の経緯から未来を展望する」

講演者 来田 享子 (中京大学)

司 会 杉森 弘幸 (岐阜大学)

10:20～12:20 シンポジウム「中学生年代の選手に対する『ボールを掴む・投げる』の指導
を極める！」

パネリスト 深見 忠司 (名古屋市立滝ノ水中学校)

仙波 慎平 (環太平洋大学短期大学部)

沖山 太郎 (株式会社モルテン)

コーディネーター 船木 浩斗 (中京大学)

12:25～13:00 総会

大会実行委員

委員長：船木 浩斗 (中京大学)

委 員：辻 昇一 (日本体育大学)・杉森 弘幸 (岐阜大学)・齊藤 慎太郎 (大同大学)

松木 優也 (武庫川女子大学)

理事長挨拶

理 事 長
市 村 志 朗（東京理科大）

このたび、第8回日本ハンドボール学会大会が、船木浩斗大会実行委員長のもと、中京大学で開催されますことを心からお祝い申し上げます。また、今大会の準備・運営にご尽力をいただいています多くの関係者の皆さまには厚く御礼申し上げます。

2012年5月の学会設立以降、日本ハンドボール学会は順調に成長しております。2013年の第1回から2019年の第7回の学会大会までは東京都内の大学キャンパスにて学会大会を開催しておりました。本学会の目的「ハンドボールに関する科学的研究及び会員相互の交流を促進し、ハンドボールの普及発展に寄与する知を創造すること」とありますように、さらなる会員相互の交流の促進を考慮しますと、様々な地域での学会大会の開催が望まれます。そこで、第8回大会では、東京都を離れ、愛知県の中京大学で開催することとなりました。この学会大会が、今まで以上の学会員皆さまの「知の交流」の場となり、屈託のない意見や議論が行われることを楽しみにしております。

ご承知のとおり、今年2020年は東京オリンピック・パラリンピックが開催される年であります。そこで、学会大会での基調講演は、中京大学スポーツ科学部の來田享子先生に「ハンドボールとオリンピックー1972年プログラム採用の経緯から未来を展望する」をご講演いただく予定であります。シンポジウムでは、ハンドボールコーチング実践者、研究者、ボール開発者という非常にユニークな演者の組み合わせで「中学生年代の選手に対する『ボールを掴む・投げる』の指導を極める！」というテーマで行います。基調講演、シンポジウム共に非常に興味深い内容であり、活発な議論が行われることを期待しております。

また、今年度の学会大会では、初めての試みとして1日目終了後に情報交換会も開催する予定でございます。この情報交換会は、屈託のない会話の出来る非常に有用な交流の場となると思いますので、会員の皆さまの積極的なご参加をお待ちしております。

最後に、本学会大会への参加が、参加者の皆さまにとって新たな「知の創造」に繋がれば幸いです。

基調講演

3月1日（日）09：10～10：10

ハンドボールとオリンピック 1972年プログラム採用の経緯から未来を展望する

講演者：來田 享子（中京大学）

司 会：杉森 弘幸（岐阜大学）

ハンドボールがオリンピック史に最初の足跡を残したのは、1936年ベルリン大会における屋外競技としての実施である。この背景には、ドイツで11人制ハンドボールの人気が高かったことがある。

一方、あまり知られていないが、女子競技に関しては、1930年第3回国際女子競技大会（いわゆる女子オリンピック）においても実施されたことが記録に残されている。この大会を主催した国際女子競技連盟は、オリンピック大会への女子陸上競技の採用をめぐり、およそ10年に及びIOCやIAAF（現在のWA）と論争を続けたことで知られる。1930年の記録によれば、オーストリアが勝者となった11人制競技は「ハンドボール」と呼称され、チェコスロヴァキアが勝者となった7人制競技は「ハゼナ（Hazena）」と呼称されたことが読み取れる。1934年第4回大会においてもハゼナは記録され、チェコスロヴァキアとの決勝をユーゴスラビアが制したことがわかる。ハンドボールは、世界初の女性スポーツ組織が統括をめざした、数少ない球技系チーム競技であった。

第二次世界大戦後には、ドイツ敗戦の影響を受け、ハンドボールの主流はデンマーク発の7人制競技へと移行した。1946年には、国際組織も再結成されている。これが現在のIFである。

ハンドボールを大会プログラムに加える審議は、1952年ヘルシンキにおけるIOC総会から見られる。同年のヘルシンキ大会では、エキシビジョン競技として実施されたものの、プログラムへの追加が実現したのは、1972年ミュンヘン大会であった。これより1大会遅れ、女子競技は1976年モントリオール大会で追加されている。

オリンピック史における球技系チーム競技の正式競技化は、サッカーとホッケーを例外として、いずれも戦後である。IOC議事録を検討すると、その主たる理由は2点あったと考えられる。第一は、オリンピックの創始者であるピエール・ド・クーベルタンが、スポーツの教育的意義を特に個人競技に見出していたことである。第二は、すでに1930年代後半から、大会の肥大化はIOCや開催地の関係者を悩ませる重大な問題となっていたことである。

ハンドボールの追加がバスケットボール（1948年）、バレーボール（1964年）より遅れた要因は、戦前のドイツ主流体制からの転換を余儀なくされたことに加え、その後の競技の主流を形成した国・地域の関係者のIOCにおける発言権の強さ等、総合的な観点からの検証が必要だと考えられる。一方、女子競技に着目すれば、戦後のソ連の加盟によって、ハンドボールはバスケットボール、バレーボールと同時に追加の要請がなされたにも関わらず、ハンドボールは他の2競技よりもIFからの要請が遅れた点に特徴がみられる。

以上のようなオリンピックとハンドボールの関わりを日本のハンドボール関係者はどのように受け止めていたのでしょうか。

ハンドボールがオリンピック競技として正式採用される前後の関係者の並々ならぬ期待は、日本ハンドボール協会機関誌『ハンドボール』（1960年5月号創刊）からもうかがえる。とりわけ、1964年東京大会においては、当初正式競技化が確約されていたながら、IOC総会において除外されることになった時期の期待、落胆、怒りは、多くの記事となって残されている。

学会当日には、この機関誌の記述をもとに、1960年代から1970年代における国内ハンドボール界の牽引者たちの「オリンピック観」を振り返りながら、2020年東京大会とその先の日本のハンドボールについて考えてみたい。

<講演者の略歴>

中京大学スポーツ科学部教授

NPO 法人日本オリンピック・アカデミー理事

日本スポーツとジェンダー学会理事

体育史学会理事

日本体育学会副会長

著書等「歴史を変えた50人の女性アスリート」（創元社、2019）

「よくわかるスポーツとジェンダー」（ミネルヴァ書房、2018）

「JOA オリンピック小辞典」（メディアパル、2016年）

「レースは過酷だったのかーアムステルダム五輪女子800m走のメディア報道がつくった『歴史』」（黎明書房、2015）等

シンポジウム

3月1日（日）10：20～12：20

中学生年代の選手に対する「ボールを掴む・投げる」の指導を極める！

パネリスト 深見 忠司（名古屋市立滝ノ水中学校）
仙波 慎平（環太平洋大学短期大学部）
沖山 太郎（株式会社モルテン）

コーディネーター 船木 浩斗（中京大学）

ハンドボールを漢字で表すと「送球」である。つまり、ハンドボールのゲームを成立させるためには、ボールを相手に奪われずに味方に投げ渡す（パスする）ことのできる力がそれぞれの選手に求められる。また、ハンドボールはゴール型の球技であることから、自らの競技力向上を目指す選手は誰も、ダイナミックなロングシュートやバリエーション豊かなサイドシュートに憧れを抱く。

日本中学校体育連盟や日本ハンドボール協会の調査（いずれも2016年度）によると、小学生の競技人口が約9100人であるのに対して、中学生の競技人口は約29000人である。このことから、日本においては中学生になった時点からハンドボールを始める選手が多いことがわかる。競技をはじめた頃に身につけたある動きは、その選手の将来的なパフォーマンスに大きく影響することから、中学生年代の選手に対してパス・シュートに関する適切な指導内容が準備されていることは非常に重要である。

そこで本シンポジウムでは、中学生年代の選手たちのパスやシュートに関する現状のパフォーマンスをよく知る研究者、長年に渡り中学生年代の選手たちに対する「状況に応じた投げ」の指導を続け日本一に輝いた実績を持つ指導者、選手たちにとって掴みやすい・操作しやすいボールをつくることを目指す企画者それぞれの立場から、コーチング現場に有用な知見を紹介していただく。その後、会場の参加者の方々からの意見も織り交ぜながら、中学生年代の選手に対する「ボールを掴む・投げる」の指導はどうあるべきかをディスカッションしていく。

<パネリストとコーディネーターの主な経歴>

深見 忠司 名古屋市立滝ノ水中学校社会科教諭，第46回全国中学校大会男子優勝
仙波 慎平 環太平洋大学短期大学部講師，第7回男子ユース世界選手権日本代表チームアナリスト
沖山 太郎 モルテンスポーツ事業本部商品企画部ハンドボールグループ
船木 浩斗 中京大学スポーツ科学部講師，日本ハンドボール協会指導委員会委員

一般発表

- 一般発表1 座長：佐藤 壮一郎（大同大学） 2月29日 13:35~14:54
- 13:35 永野 翔大（東海学園大学）
ハンドボール男子日本代表における情報分析活動の事例報告
- 13:51 栗山 雅倫・田口 真夕・田村 修治（東海大学）・嘉数 陽介（公益財団法人日本ハンドボール協会）
オープン防御システムおよび機能とそのコーチングに関する実践的考察—今後の展望を踏まえて—
- 14:07 渡辺 直葉・大塚 隆・栗山 雅倫（東海大学）・嘉数 陽介（日本ハンドボール協会）
ハンドボールにおけるサイドシュートに関する運動学的考察
- 14:23 清水 宣雄（国際武道大学）
レフェリーの客観的評価を目指して—判定の実態調査—
- 14:39 藤本 元（筑波大学）・平本 恵介（筑波大学大学院）
大学男子ハンドボールチームにおけるセット防御戦術構想の構築についての事例報告
—育成・スーパーバイザー型コーチングスタイルの事例—
- 一般発表2 座長：富田 恭介（中部大学） 2月29日 15:00~16:03
- 15:00 小俣 貴洋（筑波大学大学院）・會田 宏（筑波大学）
ハンドボールにおける育成年代のゲームにおいて勝敗に影響を与える要因
- 15:16 酒井 優和子（大阪体育大学大学院）・楠本 繁生（大阪体育大学）
大学生ハンドボール選手の自己開示行動がソーシャルサポートに及ぼす影響
- 15:32 小笠原 一生・鶴野 裕基・橋詰 謙（大阪大学）
膝前十字靭帯損傷の発生機序とハンドボールの競技特性
- 15:48 會田 宏・藤本 元・山田永子・福田 丈（筑波大学）・中山 紗織・小俣 貴洋・日比 敦史
服部 友郎（筑波大学大学院）・水野 尚芳（筑波大学研究生）・下拂 翔（国際武道大学）
高橋 拓己（東京都立葛飾ろう学校）
全国中学生クラブチームカップにおける女子大会使用球の規格変更が選手の主観的評価に及ぼした影響
- 一般発表3 座長：山下 純平（愛知教育大学） 2月29日 16:09~17:12
- 16:09 榎 浩輔（筑波大学大学院）・國部 雅大（筑波大学）
ハンドボールの7m スローにおけるシューターとゴールキーパーの注視と意識の対応関係
- 16:25 井上 元輝（朝日大学）・會田 宏（筑波大学）
ハンドボールにおけるステップシュート習得の際に目標となる技術—国際試合を指揮した指導者の語りを手がかりに—
- 16:41 鈴木 雄大・辻 昇一・阿江 通良（日本体育大学）
試合中における大学女子ハンドボール選手のジャンプシュート動作に関する研究
- 16:57 伊東 裕希（岐阜聖徳学園大学）
大学男子ハンドボール選手におけるオフenseプレーの着眼点